

王の血縁から見た古代日本と韓半島

東京医科歯科大学大学院

教授 若松 秀俊

Ancient Japan Related to Korean Peninsula by Royal Blood

Tokyo Medical and Dental University Prof. Dr. H. Wakamatsu

—

戦後間もない、子供の頃、遊び道具の少ない筆者にとって、コマを廻すことが冬場の楽しみの一つであった。コマを空中高く投げ上げ、地上に落とすとしてなお廻す。コマ同士をぶつけては、相手のコマを倒し勝負を競う。そのコマ廻しを教えてくれたのが祖父であった。自ら筆をとって大きく「龍」の字を書いて作った「凧」の揚げ方も教えてくれた。コマは「独楽」と書く。しかし高麗から渡来したのでコマと呼ばれるようになったという。高麗国を「コマのクニ」というからである。今の韓半島の国のことであると丁寧に教えてくれた。

その祖父が、戦前に、現在の福島県いわき市の煉瓦工場で工場長をしていた。その工場の向い側に在った粗末な独身寮の話をしてくれた。そこに何人かの韓半島出身の若者が住んでいた。その時の話である。戦前のことであったから、日本人の食べ物や住居もそれ相当、粗末であったのは間違いないが、オンドルのついた故郷の暖かい部屋と違って、彼らの身にはこたえる寒さであったろう。

祖父は正月の締め飾りを、また鶴と松の掛け軸、皇祖神の天照大御神と豊受大御神の掛け軸を床の間に懸け、餅・干柿・橙の組み合わせの御供えと御神酒を三宝に載せ、伝統の神々に祈りを捧げた。そして、同時に先祖を祀る仏壇を祈っていた。こんなことをごく自然な形で見ていた子供の頃の筆者であった。

ある年の暮れに、正月用に出してきた二つの火鉢を祖父がじっと見ていた。何気なく聞きただすと「彼らの暖を採る為に、冬には、韓国人の住む寮に持ち込んだものだった」と答えた。そして「正

月には料理を一緒に食べながら、遠い故郷のことを尋ねたこともあった」とつぶやいた。

この地方は、暖流の影響で雪が降らない温暖な気候であったが、冬はやはり寒い。祖父は、若者から「おやじ」と呼ばれていたと両親が語ってくれた。

物心がついて、台湾も樺太も若者の故国の朝鮮・韓国とともに、かつて日本の統治下にあったことを知った。

とくに、韓半島の統治は日本の支配の特殊性が絡み合って、支配層の教育と時の経過とともに日本人の韓民族に対する特別な意識と逆に韓民族の日本人に対する特殊な感情を醸成した。明確ではないが、両者の歴史の中での消し難い煙りは日本の側からの理由無き差別感と韓国側からの反発感の相互作用であろう。似たような感情は、実は人の住むどんな世界に行っても見受けられるのである。いわゆる日本では江戸時代に支配階級が統治の便宜のために造った特殊集団がそうである。しかし、筆者は長じるまでそのことを知らなかった。というのは、先述の地にはそういう概念がなく、いや在ったかも知れないが、周囲の誰もがそれを話題にしなかったからである。しかし、これを知ったからといって、差別的な感情は自分に生じたことはなかったのである。何故このようなことを採り上げたかといえ、支配者が被支配者である民衆の下に「哀れむべき存在」を創ることにより、民衆のもつ一種の安堵感の醸成に役立てること意図していたことを念頭に置いたからである。つまり、日本人と韓国人相互間の無意識の底辺感情は、一般の人がはじめからもっていた感情ではなく、戦前に支配者の統治の便宜的理由から「家庭教育や学校教育、それにマスコミを利用してこうした

意識を創り上げたものである」と言いたいからである。

もちろん、国家主権侵害のレベルの議論であり、その責任は国家にあり、それを支えた国民に責任がある。したがって、日本一国での特殊な職能集団に対する差別とは本質的に異なっており、国家にまたがる問題を「差別」からくる「人権侵害」という意味で両者を同一視することは必ずしも得てはいないのであるが……。しかし、一般の人々にそうして植え付けられた意識はもっと情緒的で論理を越えたものであり、それが今に尾を引いていることが重要なのである。

とにかく、その頃から、韓国に関する何か特別な思いを常に胸に抱くようになった。同時に、祖父の言動を深く思うようになった。戦前にあって、周囲の人々がもっていた韓国の若者に対する複雑な感情を意に介せず、自分がそうしたいから、そうしたという、頑固で優しい心根の祖父を成人してからも時に思いながら、日韓両国の問題を少しずつ考え始めた。

そんなこともあって、日本列島と韓半島との交流が日本史のなかでは、文化的交流と相互影響については別として、日本の現在を語るために遡る「歴史の中の人的交流」が日本の立場から語られるだけで、その当時の社会的、軍事的状況の合理性を欠く説明部分が少なからず見受けられた。無論、歴史は自らの存在とその立脚点から語られるのが常で、個々の人間関係でも第三者に語る場合はそのようになるのが当然である。つまり、現在を語る自分の正当化、現在の姿が当然の帰結として予測できるように、後世から意図的に組み上げたとと思われるようなことが、古代から日本国家形成期に少なからず見られるのである。太古の昔、つまり神話の世界は、祖先の記憶と美化のためにどのように表現しても自由であろう。どの国にもそれ相当のものがある。ところが一定の関係が見える時代になれば、一方的に立場を主張することはできないし、それだけでは済まないはずである。歴史の中の出来事に関しては、とくに愛憎に関わる事件に対しては身近な事例からいっても周囲からの故意の意識づけが如何に大きな感情的影響を及ぼすか、祖父の態度と言動を思い出してもその推測に難くない。

相互の抗争は世界のどこにでも、そしてどの民族にもある。しかしそれよりも、一見正当に見える歪曲した論理が繰り返し意識づけされることによる感情が人々の間では問題になるのである。したがって、韓国人と日本人を個人としてみた場合はともかく、集団として見た場合の感情の関わり合いは相互に見て、一方から良かれと思って相対しても、その論理の中から生まれる共通の認識すら嫌悪する対象になりかねない。それからという

ものは、韓国の、いや正確には当時の半島の支配者が古代に於いて、当時の列島にどのように関わって来たかを考え、当時の日本がそれをどのように受け止め、自らのものとし、如何に現代に伝えてきたかを根底から考え続けてきた。

そんな中で、あたかも神代の昔から、今に至るまで変わることなく、最初からそのまま存在していたようにいわれる日本民族が韓民族とは異なる流れの中で維持され存続したとする誤った見方に至った理由づけと相互交流から生まれた両国に見られる決して少なくない共通性は、この間の筆者にとって、いつも大きな関心事であった。そして、それがきっかけで今に連なる近代の韓国との関係をも考えるようになった。その結果、古代から日本国の形成までの時期に関する事実認識に関する根本的な違いが最大の障害になって、両国との軋轢が生じたものと確信するに至った。もちろん、近世の両国の関わり合い、さらにこの百年間の政治的・軍事的・人権的関わりは目に見える大きな障害ではあるが、それでもなお筆者には今に続く古代の認識の相違が諸々の誤解と感情の軋轢に関する大きな根源の一つであると思えるようになった。

二

こうした認識から、筆者は、歴史上の人物だけでなく、本件に関心のある人々の言葉も折に触れて借用して、今日までなお受け継がれる渡来人達^{トウライジン}が果たした役割と影響を支配者の血脈の視点から描いてみた。

その中で、多くの人々によって、これまで繰り返し言われていたことをも含めて、これらを物語風に、主観を交えてまとめてみたのが、未だ出版に至らぬ、拙著『王家の祠』である。

したがって、本書に登場する人物は史実またはそれに類する人々であるが、その相互関係のかなりの部分に、筆者の推測が入っているのは否めない。それゆえ、日本と韓国の史実に関する見解が一致しないことや、諸説あって、皇統や関連する韓半島の王統が小説内では通説と異なっている部分がある。また、古代の呼び名については、当時は王であっても、後世に統一的に使われてる天皇の呼称と諡号^{スイゴ}を用いた。なお、人名・地名のふりがなについては、中国大陸・韓半島に関連が深い場合には、その発音に近い読みとした。その中で、同一人物・同一地名が本邦での史実に関してより密接に関係したり、後に定着した部分では、概ね、先に原語に近い発音を用い、後には日本語の発音で訓じた。

この物語は今から千七百年余り前に遡る。三世

紀中頃、まだ、国やその境界の概念が極めて希薄で混沌とした頃、倭と呼ばれた韓半島南部と北九州一帯での武力に優れた人々の間に鉄の利権を巡る絶えざる抗争があった。この動勢が結果的に、半島南の加羅地方から海を経て渡来した有力な扶餘王家の傍流に大和国家の建設の起点を与えることになった。これが日韓両国民に特殊な感情をもたらす任那である。任那から大和の地に入った一族の長が大王家の祖先となり、本邦での多方面にわたる総合的な力を最初に発揮する基礎を築いた。軍事能力と統治能力に優れた彼等はまもなく、古墳時代の支配階級となった。そこには、北方で遊牧生活を営む扶餘族の「天孫降臨」と「國譲り」の強固な思想と統一的な王室維持のために血脈の乱れを極力避ける伝統的風習が受け継がれていた。それは天孫としての王権と王家一系の血脈の重視とその堅持法であった。王室直系に血筋が近いほど、天上界の支配者たる神々と地上界の支配者たる王位により近い。従って、国土は当然のこととして優位な血統の王族に譲られるべきものであり、血統のより優位な者が出現すれば、これを組み入れ、地上の支配権をずっと維持することを常に意識してきた。

その結果として、連綿として受け継がれた血筋が皇統を形成してきた。その過程のなかで必ずしも十分にそれが維持できない事態が生じたときにも、皇室自身が、またその周囲が血の濃度を一定範囲に保つ方法を選択し実行してきた。これこそが、長い歴史の中で、皇室が権力の枠外に置かれた時でも、いわゆる万世一系と云われる血筋による皇統を維持できた最大の理由であろう。このことによって、遠くは扶餘に遡る天孫の一系であるとの思想を基盤として、皇統に最も色濃く入った百濟王家の血統が、政治権力とは別の次元の高い尊厳と文化の担い手とされてきたことと同義として受け入れられてきた。

このことを取り上げたのは、古代日本の支配者の核となった皇室の成立に言及せずして、日本を語れないのはもちろん、誰もが深層に己のルーツを知る願望を常に備えているからである。言い換えれば、文化人類学的または生物学的総体としての遺伝学的ルーツであれば、科学的にそれに接近可能であるが、個々の人についてはそれができないからである。事実、韓国に今に伝わる^{シヨクガ}《族譜》について触れるなら、この膨大な《家系と本貫》の記録を自分の家庭に備え、時にこれを参照し先祖に想いを馳せるといふ。韓国人が如何に自らの《出自と血筋》を大切にしているかを、そしてその伝統が今も息づいているかを我々に教えてくれる。実際に、ソウル在住^{チョンウイミョン}の全義明氏の提供による^{オンジョウワン}温祚王の側近十名の王族に連

なる^{シヨクガ}族譜の一部と墳墓に関する貴重な資料を目にすることができた。これをみても、先祖への思いは理解できるのではないだろうか。

それゆえ、不十分でも内外に《記録》が存在し、世界のどの王家よりも古く遡れる日本の家系の代表でもある皇室の祖を少なくとも日本国民が何とか知りたいと思うのは当然の成り行きであり、感情の発露でもあるはずである。したがって、その解明が少しでも可能であれば、その近辺や周囲にいた我々の祖先の生活の様子や役割について、心安く誇りをもって思いを巡らすことができるのである。また、そのことは皇統の成立過程が皇室自身のみならず、日本を創った人々と半島の人々の間に密接な人的交流と文化交流が行われたことを認める客観的証拠たり得るはずである。そして、そこに今日の日本形成の重要な根幹と文化の発展の礎を確信できるはずである。

絶えざるこの地域の多面的交流の中で、古代の地域文化圏の境界が固まるとともに、いわゆる日本民族も韓民族も今の姿に変化していった。これを事実として認識することが、とりもなおさず、両地域の相互信頼を構築するための前提であり、それが現在から未来にわたって、両国の正常関係構築の第一歩であると固く信じている。その背景の一つには、永きにわたる皇統をどのような形であれ、日本列島・韓半島とその周辺の地域の人々が結果的にはともに支えてきたという大きな認識があるからである。その理由は、皇室を一つのシンボルとして少なくとも日本人、いや日本そのものが、長い歴史のなかで、無数の人々の血、智恵、社会が混じり合い、融合・調和して、文化を形成し、より大きく発展し今後もそれが続く可能性を秘めながら、今日、現実に子孫の我々と世界の人々の眼前にその姿を現しているからである。

三

そのような見地から、日本はもとより韓半島の人々の思いも強く意識して、まとめてみた。しかし、これはあくまでも学術書でないので、ここで執筆の動機と背景を述べる必要がある。

まず、題目の『王家の祠』であるが、これを選んだ大きな理由は、百濟の王族の一人が半ば伝説的ではあるが現在も近江日野市の祠に祀られていることと韓半島にはいまや、王室そのものが実在せず、すでに祠に入っている状況にあることである。そして副題の『古国・百濟の血筋』は望郷の念から古国（クナラ）を懐かしんで、クナラと呼んだことが百濟の呼び名に連なることと、今に残る『海に架けた王の血縁』が遠く、皇室に連なることを意図したからである。また、百濟

滅亡時の王族の父子である鬼室福信と集斯がそれぞれ百済と大和に別れて生涯を終えたこと。その上、桓武天皇の母の高野新笠が武寧王の子孫であることと、自ら寵愛した明信が義慈王つまり武寧王の子孫であること。さらに桓武だけでなく、その子の平城、嵯峨の後宮には当時もっとも優雅で気品溢れる百済王家から数々の女性が入り、間に生まれた内親王が藤原氏などと結ばれ、その子が再び後宮に入るといように巧妙に支配者としての血の伝統を守っている構図が見られるからである。この血を維持する様々な方法は後の武家の世の中になっても基本的に同様であった。

こうしたことは、ずっと昔から知られていたことであるにも拘わらず、何故か今までみんなが沈黙してきたのである。真実を知ることこそが理解と友好のはずなのに、これに目をそむけ感情的なことばかりがずっと強調されてきた。それゆえ、諸々の両国を取り巻く環境や状況が変化しつつある、今こそ、普通の言葉で双方の思いを相互に言い交わしたいと念じて『王家の祠』の物語を展開した。

この物語は近江日野で、筆者になぞらえたこの物語全体の主人公でもある一人の「旅人」が鎮守の森に佇む質素で小さな祠を偶然に見たことから始まる。その昔、韓半島から渡来した貴人のものと伝えられる墓碑が小さな社殿の裏にある。百済の將軍福信の子の鬼室集斯を祀ったという。日本書紀の記録からは百済が滅亡したとき集斯と一緒に四千人を越える百済の人々が渡来したことが知られている。多くの百済の優れた技術者が当時の大和の国家の基礎づくりに参加した。それ以前にもすでに、四世紀初頭には政治力と軍事力に優れた朱蒙の血を引く百済王との血縁にある王家の血筋が、この大和の気候の穏やかな領地を圧倒的な武力で広げていった。大和の有力者は殆ど半島から先進文化を携えて渡来した者であって、六世紀に強力になった蘇我氏も新しく登場した百済の血であった。血の純度からいえば、蘇我氏の血は大王家と同等にあった。彼等が当時の王家に取って代わろうとしたことも頷けよう。

百済王朝滅亡時には、百済王家の血脈が大和宮廷に入り、いまでも皇統に続いている。大量に移住した人々が韓半島の古い踊りや舞楽を楽しんだのが、現在の日野市の丘陵地帯であるし、彼らの風習も全国に広がった。近くに朝鮮坊山が見える。社会が安定するにつれて、この辺りを舞台に日本の宮廷の人々も生活を繰り広げた。この地では前述の集斯のものと伝えられる墓碑に、いまでも村人がお供え物を差し上げ大事に護っているとのことである。もちろん、この地では、平和ばかりでなく、王家の血を巡る悲慘な争いが何度も起こった。しかしその中でここを舞台として、この地で繰り広げられた宮廷の雅な文化が大きく花開き、いまに連なる伝統を形成して行く姿との関連をも物語風に描いてみた。

これとは別に、半島からの渡来人で祀られた人びともいる。禰嘉王子の家族五人である。現在の宮崎県南郷で

今も《相逢祭》として、年一回二つの神社に祀られている別離家族の出会いの儀式が側近であった百済人の子孫によって行われている。そこには現在の韓国の地名や読み、韓国語として理解し得る言葉が残っている。また、現在の大阪府枚方市にある百済王神社は直接的に百済王朝と縁があり、後の日本の王朝や文化に大きな影響を与えている。この社は、百済王朝で事実上、最後の義慈王の子の禅広を祖とする敬福が、代々の祖先を祀るために建立したことが知られている。この神社の境内にあるのが百済寺跡で、特別史跡に指定されている。禅広は六四三年に兄の豊璋王子とともに来日した王族であった。父の義慈王は百済の滅亡を怖れて、備えのために二人の王子を友好国の大和に送っていた。しかし、実際のところは人質であった。これが物語の後半の背景でもある。つまり、百済滅亡時に、亡命者となった百済王子禅広に連なる敬福とその孫娘の明信がこの物語後半の主人公になるからである。時代が下って敬福が聖武天皇との関わり合いのなかで、遠い扶餘の伝統文化が息づく姿を目の当たりにしていること、さらに孫の明信や一族と桓武天皇をはじめとする皇室との関わりを当時の政治、宗教、産業を背景に置いて描いてみた。国家基盤の整備だけでなく新たな専制的国家体制の建設が、なおも百済、高句麗、新羅の文化を礎としていること、さらに、それらが日本独自の文化としての成熟期に大きく連なっていること。最後に、今日よく知られている花鳥風月を基礎とする平安文学にも登場する著名な人物にも触れながら、そして王家の血の架け橋とそこに生じた血の怨念を歴史の中に包み込む形で、「旅人」がそれらの現在への影響を語る、筋書きである。

四

日本を取り巻く諸々の地理的事情を思えば、日本人が遠くシベリアからきた狩猟民、南方から来た漁労民、そして中国大陸から移動した農耕民など時代別に様々な集団的移住があり、やがて地域差があるものの、相当程度に混血が進み、今のような形になったことは否定できない事実である。NHKの「日本人はるかな旅」でも、科学的裏付けとその解説が放送された。やや繰り返しになるが、三世紀前後から韓半島より本邦に押し寄せ移住してきた渡来人と、少し遅れて、三世紀後半に渡来した皇室の祖先が、本邦で先住豪族と比較して相対的に大きな力を備え、いわゆる古墳時代の支配階級となったことは種々の考察からいって間違いないと筆者は思っている。

文化の交流の本質的要素でもある言語については、音韻学的には南方の開音節である。現在の日本語の文法が韓国語に酷似しているのは、支配者の言語の音韻は受け継ぐことなく、その文法を受け継いでいるからであろう。音韻は単純でマレー・インドネシアなどのポリネシア系

の言葉によく似ているのは周知のことである。

こうした支配者とその周辺が日本の皇室と文化の礎を先住民との抗争と協力のもとに形づくったといえよう。しかし、その支配者階級には、統一的な王室維持と血脈の乱れを極力避けるといふ北方騎馬民族の特徴的な掟があり、それが王家一系重視の思想と血統の強固な維持を強制した。そして、支配を天から許された地域が、海峡で分断されていたために、当時の被支配者と今に続く独自の王家とのやや特別な歴史関係が生まれた。王室に血筋が近ければより王位に近く、権力から遠ざかって、なおその血への尊厳がその一系の宗教的・文化的レベルを支えてきた。そして、その血筋が連綿として今日の皇統に連なってきたことである。これこそが、巷で云われる一系を維持できた理由に連なるものであろう。したがって、王家は、王権に十分な血の純度と考えた範囲内に婚姻により維持してきた。それと並行して、支配者階級の周辺の家系以外の者には、混血による血の均一化を求め、随時・随所でそれを行ってきた。

韓半島が日本の支配下にあったとき、日本政府は一部の歴史家の意見を取り入れたのであろうが、とにかく韓民族支配のために、国家神道を半島に持ち込もうとした。即ち官幣神社を作る動きがあった。韓国や中国でことある毎に問題になる靖国神社と同格の国家神道神社を百済の古都の公州に作ろうとした。このことは、皇統に最も色濃く反映された百済王の血統が遠くは扶餘族に遡る百済の天孫の一系であると考えて、血統の尊厳重視の立場を根底に抱く、当時の歴史学者が承知のうえでこの計画を立案したようだ。証拠はないが、そう推測される。

筆者が、このようなことを敢えていうのは、ただ、日本を創った人々と半島の人々の間に密接不可分の人的交流と文化交流が遠い昔に行われたことと、それがずっと継続して、今に至ったことを率直に認めることの重要性を主張したいからである。そして、古代の地域文化圏の境界形成とともに、日本も半島も大陸も今の姿になったということを率直に認め合うことが、とりもなおさず、相互の信頼を構築するための基礎となるからである。またそれが良かれ悪しかれ、今後、この地域の真の関係確立の端緒となると信ずるからである。

日本国家が形成されたのは、唐・新羅に敗れた後に、天智天皇が国をまとめ、さらに新羅系の天武天皇が唐の制度に倣って法や制度の整備を手掛け、その後、間に文武天皇を挟んで、続く持統、元明、元正の三女帝を経て聖武天皇に到るまで、行政諸制度の基礎と経済の仕組みを整え、それらに関する学問的裏付けを行った時期である。そして、さらに持統女帝を通じて一応百済の血の一系が保たれていた称徳天皇の後に、元々の天智天皇の直接の血統にあった光仁天皇を経て百済の血に還った後に、その子の絶対君主を意図していた桓武天皇の代になった頃であろう。事実、桓武は大帝国の唐に倣って、長岡京の南郊の交野柏原に郊祀壇を築いて北天祭祀を催した。併せて遷都の神恩を謝し、自らの地上における権

力の確固たることを世に誇示した。これは、陰陽道に基づき、中国の皇帝が毎年冬至に天壇を設けて北天を祀り、北極星と日月星辰の運行から、季節を知り、暦をもって農民の生活を導いたことによるものである。

日本に興味をもつ人々の多くは、後発の有力なひとつの文化がそれ以前に優勢であった文化を破壊することなく、それどころか、旧来の文化が中核となって輸入した後発の優れた要素を吸収し、融合し、発展させてきたことに驚きを隠さない。そして、その象徴的な証として、日本の皇統と皇室さらに全土に今なお健在な神々をみることを挙げている。皇統が続いたことにより、皇室が日本文化と一体化して、時代の変化に即して共に永きにわたって変貌してきた。その流れの中で皇室が支配階級からも一般国民からも大切に護持されてきたことに、彼等は重大な関心もちながら、この事実を世界史の例外としてではなく、その本質的理由を歴史の中に見い出そうとしている。そこには、日本人はもとより、古来アジアの諸々の人々の間の様々な対立、抗争、融和、同化の長い歴史的過程のなかで、膨大な時間をかけて形成し、洗練してきた雅の伝統の維持を皇室が核となって担ってきたことがあげられる。というのは、集約された雅の文化を皇室とともに周辺広く、多くの人々が育み、展開し、共に支えてきたという確かな数々の事実を見ることができるからである。これには必ずしも納得できない要素もあるかも知れないが、そのような観点に立って、日本の文化を継続・維持・発展の中で大きく認識すれば、これまで日本の歩んできた大局的な歴史の歩みについては日本人は誇りをもって考えることができよう。もちろん、近代史における日本の国際情勢の誤った認識と実際の侵略行動については、深い謝意とともに、繰り返し自責の念と反省をしながらではあるが……。

五

韓半島一帯には、三国時代にはすでに中国から漢字と文学が入っていた。このころは、漢字の意味と音を使って表した史読で広く国語の記録が行われていた。日本の万葉仮名に相当するものである。その時代の歌は新羅の郷歌が代表的であり、彗星歌、蕃童謠などが伝えられている。楽器には管楽器、弦楽器、打楽器など、いろいろなものが見られた。笛の三笙とコムンゴ、伽・琴、琵琶の三弦があった。それを用いて多くの曲が作られた。百済音楽は高句麗音楽に近い。大和の宮廷音楽に大きな影響を与え、百済王の子孫の三松家によって現在の皇室に代々伝えられている。新羅統一期には郷歌が仏教の影響を受けて発達し、僧侶や上級貴族の花郎の間で多くの作品が創られた。花郎とは、上級貴族の師弟を出身母体として眉目秀麗な者が着飾り、儒教・仏教・仙教の三教を修めて、国家のために貢献するものであった。これ

を源流に花郎道と呼ばれる民族主義的思想が生まれた。それから、ずっと時を経て、八〇八年にこれらの郷歌を集めて歌集『三代目』が編纂された。当時の歌が『三国遺事』に収録され、今日まで十四首伝えられている。多彩で高い精神世界を築いていたようだ。現存する歌が少ないのが残念である。

日本では同時期に和歌が発達した。そして、のちに万葉集として集大成された。四千五百余首の中には、古くは仁徳天皇の皇后の相聞歌、皇族の雑歌や挽歌などが見られる。しかし多くは舒明天皇以後のものである。このことは皇統がその時期の半島と密接な関係があることを如実に表している。

この時代の古墳に高松塚古墳、キトラ古墳がある。同様のものが半島にも見られる。例えば、前者には高句麗の古墳壁画に酷似した女人像が描かれていることが、また後者には高句麗で観測される天空の星辰図(天文図)が確認されている。これらは、韓半島との不可分な関係を物語っている。後世、万葉仮名の読み方をこの半島との歴史的関係から推測、検証したことが知られている。また、近年韓国人の手で万葉集の字句の解釈と和歌の隠された意味が研究されているし、和歌に詠み込まれている万葉歌人が託したメッセージの興味深い解釈も行われている。

ところで、祭祀などに際して使う言葉が宮廷用語として受け継がれていた。このなかに、王を意味する古爾岐支《コニキシ》という言葉がある。これに関連して王妃という古爾女人《コニオルコ》という言葉もある。どの国でも民衆の風俗と言語は変質するが、王家の風俗と言語はかたくなにまで変更されないことが少なくない。皇族の周辺で使われてきたといわれる用語が韓国語に類似していることは注目に値する。例えば、天皇の呼称が《テンノウ》の他に《コニキシ》と伝わっていたことである。これは初代の崇神天皇が百済古爾王の血筋にあたるからであろうか。大和に正式の王がなかった時代なので、古爾王の幼名が《岐支》だったことから、古爾に岐支を合わせて王を《古爾岐支》と呼んだことがやがて天皇の呼称に転じたという説がある。王妃をさす《古爾女人》は同じく百済の古爾王に因んだ言葉で、当時女子を《オルコ》と呼んだので《コニ オルコ》といわれる。

また皇太后を《オモニ》と呼んだという。これは当時の百済語の母の尊称であり、現在の韓国語でも同様の意味である。また、これは王母を意味し、《アジュメ オーゲヨ》は女官を呼ぶときに使う皇室用語であったという。《アジュメ》は慶州地方の方言でもあり、《アジュマ》の丁寧語でもあるとのことである。ところで、日本の皇室に連なる藤原家・冷泉家では、《オモ(吾母)》、《アチマ(叔母)》とよんでいたという。おそらく、前者は《オモニ》と、後者は《アズムマ》あるいは《アズモニ》と関連のある言葉であろう。

もっと興味深いのは、《ペンノリ(船遊)》という言葉で

ある。宮崎県南郷の人々は酒席で盛り上がると《船遊歌》を歌う古い習慣がある。その歌詞は《ペンガマンへ、ペテウコ(白馬江にて、船に乗って)》オギヤ テイヤ オギョジャ 《ペンノリ カジヤンタ(船遊に行こうよ)》である。歌いながら船遊をしたという。原形で全体を歌うと、間に挿入された船を漕ぐかけ声《オギヤ テイヤ オギョジャ》が自然に出るようだ。まさに《白馬江での船遊び》の歌詞がほとんど完全な韓国語のまま、受け継がれているのである。

また、韓国語によく似た方言を幾つか見ることができる。例えば、村人は何かに盡力した場合に《ヒンタレッタ》という。これは百済語の《力をつくした》という語彙から来た言葉である。また、自分の父親を《アボ》と呼ぶが、これは《アビ》あるいは《アボム》から来た言葉である。

これとは別に、日本の一般的な作別人辞の《さよなら》とは異なって、この地では《オホ サラバ》と言う。これは韓国語の《ザル サルバ(よく生きる・裕福になるように)》という言葉から接頭句の《ザル》を抜いて代わりに《オホ(嗚呼)》の二文字を付けて《オホ サラバ》になったという。これにはつぎのような伝説がある。百済が滅亡した時、義慈王の息子の禎嘉王子が妃と三人の子福智、華智、白智および数名の家臣、宮女とともに南郷に亡命した。禎嘉と華智は南郷に残り、妃と福智、白智はそこから離れた財部に暮した。やがて、追撃軍により禎嘉が襲われた。この時、福智が父の危急を知って南郷を訪ねた。禎嘉は福智の手を握り「お前たちは無駄死にせずに《ザル サラバ》……」と言って亡くなったという。禎嘉王子の魂を祀る南郷の神門神社と福智が眠る財部の比木神社の氏子が父子間の出会いの年末の祭を以来、千三百年を越えた年月にわたって毎年続けている。この祭りを終えて人々が別れる時は、《オホ サラバ》といひながら別れる。これを禎嘉が福智に最後に残した遺言として、村人は百済の王家に熱い感情をもつとのことである。

なお、神門神社で発見された三十三個の《傳世銅鏡》を保管するための西正倉院が一九六六年に完成した。禎嘉に同行した家臣の後裔がこの建設に携わった。これによって、禎嘉の怨念が氷解し、また《相逢祭》が国際観光事業となった。この地域の村人は自分たちが百済人の後裔であることを誇りに思っている。《傳世銅鏡》の幾つかが日本国宝に指定されている。これらと奈良正倉院所蔵の国宝級文化財の鏡の形態と材質が同一であることが知られている。これらの銅鏡等は『梁書』に記録されている百済の行政組織である二十二檀魯諸侯の任命状だったという説がある。国見山の辺りに禎嘉王と華智が住み、また韓国岳の周辺に妃と福智が暮した。彼らは故国の山河を懐かしみ、山に登って百済側を眺めたという。

ここで、話は若干ずれるが、時代がずっと後の十六世

紀末に名を残した沙也可(金忠善)に触れてみたい。この人物は日本と韓国の架け橋となった実在の日本人である。韓国の書『沙也可慕夏堂記』から、『島夷』に因んだ対馬武士で沙也門という日本名を推測している人がある。儒教の文明にあこがれていた彼は秀吉軍として渡鮮後すぐ朝鮮王に降伏し、逆に秀吉軍と勇戦奮闘した。そのころ技術的に完成していた鉄砲製作と射撃法を朝鮮軍に教えた。それゆえ、鉄砲軍団として名高い雑賀衆の別名とも言われている。壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)後、大邱の南方の友鹿洞に隠棲した。彼の号が慕夏堂で、当時の朝鮮国王の宣祖から金姓を賜り名を忠善とした。妻は晋州の牧使という地方長官の張春点の女であった。沙也可の配下の者も何人か一緒に山野を開墾した。その後、北方異民族の侵略に対して三度出兵した。李朝は功に報いて高い官職の正憲大夫を与えた。彼は官吏としての栄達を求めることなく、仁祖二十年にこの村里で没した。彼の教えは権力と名誉への志向の堅い戒めであったという。慶尚北道達城郡嘉昌面友鹿洞が本貫で、その風景は日本的である。この金姓は特権身分階級の両班であった。現在十五代目である。『慕夏堂金公遺蹟碑』があり、秋には山吹が咲く儒教の祠堂には「慕夏堂先生」と刻まれた桐の位牌がおかれ、この村を自分の姓の本貫としている家が韓国で約五百戸、四千人である。村を離れた今もこの祠を訪ねてくる。

この時代の頃までは、このように両国を往来できる心理的環境が存在していたのであろうか。日本の童子女の風俗画に酷似した、この時代に描かれた韓半島の絵画を以前に博物館で眼にしたのを思い出す。

六

相撲の儀式も民衆の農業神事の中に巧みに取り入れて、古来の風習と同化させ民の安寧をも祈願するようになった。上古のころから、相撲は農作物の収穫を祈り占う農民の祭り事であった。このような五穀豊穡を祈願し、また神明の加護を感謝する奉納相撲は今も村の鎮守祭りに見られる。祭りの《わっしょい、わっしょい》は《来た、参りました》という韓国語《ワツソ》由来という。相撲の《はっけよい》は《やります》との韓国語《ハッケ、ハルケヨ》に原型があるという。古墳時代には盛んに相撲を取っていた形跡がある。和歌山県井辺八幡山古墳から出土した力士埴輪がある。この古墳は高句麗系で、六世紀初頭のもので推定される。皇極天皇時代には、百済の使者をもてなすため、宮廷の兵士の衛士を集めて相撲を取らせたことが『日本書紀』に載っている。高句麗、百済では、占星術と併せて農事占いのひとつとして相撲が王家で行われていた。この伝統が、古く渡来してきた大王家の祖先と随行した人々の間に受け継がれていた。外国から来た使者は古式豊かな相撲と管弦に舞を伴う舞楽のもてなしに感激した。平安期に入って、毎年七夕時に

宮中行事となり、制度諸式も整い、ついに三百数十年間続く相撲節という重要儀式になった。節会相撲には土俵と行司がなかったが乱暴な技が禁止され、今日に見られる洗練された形と内容が生まれ、やがて日本の国技となった。相撲節が廃絶になった後も民間や武將らの保護を受けて、次第に儀式や装束も整い現在の姿に変わってきた。そして、後世には土俵入りや弓取り式なども行われるようになった。それは神聖な領域での勝負と勝者に対する賞賛の表現であり、やがて伝統の神道と融合して、美しさを体現する相撲文化を形成するに到った。力士が心・技・体として結実し、最高位を極めた大関が特別に綱を締めるのが、完成したその姿の象徴となったのは江戸時代から明治にかけてであった。玄武・朱雀・青龍・白虎に因んで柱が立ち神明造りの屋根を支え、その下の土俵で力士は相撲をとった。それは、まさに、道教方位四神と古来の神祇が結びついた世界の中での《力比べ》の儀式であった。戦後は、天井を吊り、さらに方位を示す房が吊された。天皇が正面の位置に座れば、力士は東西に別れる。土俵を作る米俵は農業神への奉納の名残であり、横綱が締める綱も注連縄がもとになり、それらがすべて融合して現在の姿になった。しかし、相撲そのものの支える思想の源流はやはり遠く扶餘にあった。

ところで、日本の神仏混淆の八幡信仰には、放生会の儀式がある。秋の祭りに鯉、鮒、亀、鳥、貝などを放ち、生き物を供養する。この儀式は仏教の殺生戒に基づく。白馬江の渡し場の亀頭来から亀や鮒を餌とともに祈りながら放流する。このとき黄や赤茶の衣を着た僧侶が経文を唱え、民衆が祈りを捧げる。今も続いている儀式である。その源流は八幡信仰の放生会と共通のものであろう。この渡しの名《クドウレ》が《くだら》になったという説もある。

次に、歌垣(・歌會)について語ろう。七七〇年三月、河内の弓削の称徳離宮で歌垣が行われた。万代にわたる帝と離宮の存続を祈り、周囲六ヶ村の男女二百三十人の渡来人が夜を通して歌い踊った。歌垣は若い男女にとって、他の部落との間の通婚の機会設定に大きな役割を果たしていた。このころは、山麓の景勝地まで人々が出かけて、賑やかに野外舞踏会を開いたものであった。というよりは、日のあるうちは野に遊び、日が暮れると篝火が灯され、酒が入って宴は佳境に入る。日野の朝鮮坊山では、毎年歌垣が行われていた。お月見の習慣と併せて、韓半島からの伝来の風習であった。いまも扶餘や慶州あたりの野原では、夏の夕べに月見の宴を張る。これを野遊とよんでいる。大和の民衆もこの楽しみをまねて、農業神事に取り入れた。

慶州の仏国寺の松林で、水色・桃色・緑・赤など色とりどりの袴・上衣を着た老若男女が楽しそうに踊るのを見ることができる。杖鼓を膝の前において鞭のようなパチで打つ。このリズムに合わせて踊る。韓国ではいまでも一般の家庭で使われている楽器である。日本舞楽の羯鼓

に似た楽器である。筑波山麓の・歌會や常陸国風土記にある童子女松原の・歌會が知られている。筑波嶺の・歌會で詠んだ歌一首と短歌が万葉集巻九にある。この伝統が盆踊りの形で現在の日本に引き継がれた。

称徳天皇が離宮で過ごしたこの年の八月、世の中を騒がせた弓削道鏡は下野薬師寺に配流され、和気清麻呂が都に召還された。宇佐八幡宮のお告げにより、天皇の地位を窺った道鏡が追放されたからである。皇室の流れにある渡来系の高僧であっても、さらに天皇の譲位の強い意志があっても、血の濃度と周囲は彼に皇位を許さなかった。

天孫の血の執念は、想像以上のものがあつたようだ。王家の後継争いは過去から延々と続いていたが、すべては、血統を優先する争いでその枠を越えることはなかった。

七

壬申の乱の平定後、六七三年二月になって、新羅系の天武が飛鳥浄御原で即位した。国際感覚に優れた新天皇の即位を祝う遣使が新羅はもちろん耽羅や高麗からも相次いで来訪しこれを慶賀した。これを契機に大和は、諸外国と幅広く遣新羅使・遣高麗使外交を開始した。しかし、この時代は大和の基礎が整い、新羅の影響もあって、優雅な白鳳文化が開花した時期であった。天武天皇は武勇に優れていただけでなく、占星台を創り、天文と占術を能くし、農業神事を司り、天皇を中心とした国家体制の基礎を築こうとした。自らの経験からも、皇統の血脈の乱れからくる内乱を何よりも恐れていた天武は即位から六年経った吉野行幸の際に、《相扶ケテ逆フルコト無キコト》を六皇子に盟約させ、政権の基盤を整えようとした。血の団結こそ、国防の要であるとした。そのために、律令官人制や公地公民制の整備を推進するための飛鳥浄御原令を制定し、皇位継承についても準備を整えた。次いで、天武は宮中での身分制度を改め、八色の姓、冠位四十八階を制定し、朝服の色をも定めた。さらに、宮中での礼法のうち過剰な伏礼、跪礼、匍匐礼を禁じ、例外は認めるものの孝徳天皇時代に行われていた立礼に簡略化した。

一方、『日本書紀』の編述など、自らの皇位の正統性を主張する国史編纂に意を注いだ。また、川原寺に『一切教』の写経を納めて仏教の振興につとめ、僧正・僧都・律師を任命し、僧職を国家の統制のもとにおく制度を整えた。さらに、諸国の庁に仏舎を作り、仏像と経典を置いて礼拝を奨める詔を出した。

その頃、漢詩に優るとも劣らない独自の美しい境地に立つ大和の詩歌を詠む歌人がいた。柿本朝臣人麿である。この天才が宮廷で天皇や皇后と親しく交わっていた。まさに、天武の意志と新羅文化の影響を強く受けて花開い

た、優美な文化を謳歌する宮廷の様相であった。

六八五年に天武天皇が崩御した。天武との間の自らの子、草壁皇子の身分が安定していないのを懸念した鸕野皇后は、時を移さず、皇后の身分で称制として自ら政務を執る手筈を整えた。もしかすると血の濃さからいって姉の産んだ同じ天武の子の大津皇子が有力な後継候補となる。何とかそれを避けなければと思った。そのためには、この皇子を除く必要があつた。崩御後一ヶ月、陰謀を廻らした。そしてついに大津皇子は朝廷より謀反の嫌疑をかけられて、宮廷のほとりの磐余池の堤で辞世の句を残して死を賜った。靈魂を保持する鴨になぞらえて皇子が埋葬されたのが二上山である。大和朝廷にとっての聖なる神を祀る三輪山の《日の出》を想い、浄土へ連なる二上山の《入り日》のなかに、愛する人の姿を見た。雄岳と雌岳が寄り添うように立つ美しい山々を眼にして、姉の皇女が溢れる哀惜の情を詠んでいる。皇女の死者に呼びかける哀傷の声が今も筆者の耳に聞こえる。最も有力な姉の子の大津皇子が、皇統から抹殺された。

ところが思いもかけなく草壁皇子が急死した。父天武天皇崩御後、未だ三年にも満たない時期であった。母鸕野皇后の嘆きは尋常ではなかったが、皇太子として草壁皇子の跡を何とかその子の珂瑠皇子にと心の内で必死に考えていた。そのためには、天皇となるべき日皇子の地上支配権については、その母である自分を天の支配者の日女尊(天照大御神)になぞらえて、祭祀権を一定期間保有することを側面から正当化する必要があつた。日並皇子尊と呼ばれた草壁皇子の殯宮の時、そのための長歌と短歌を側近の柿本朝臣人麿が詠んだ。これらの詠歌には、哀惜の情だけでなく、明らかに、政治的意図が見られる。それまで皇位は自分が預かって、時期が来たら確実に譲り渡そうと言いながら、《草壁皇子と妹の阿閉皇女の間生まれた珂瑠皇子に》と、最も百済の血が濃い皇位継承を考え、六九〇年に自ら即位した。そして、四年後には都を藤原京に定めた。畝傍山、香具山、耳成山の太和三山に囲まれた風光明媚なこの地に造営した本格的な都城であった。東西二・一キ、南北三・二キで、大極殿を備えた統一国家に相応しい都であった。それまでは、天皇の即位ごとに新たに宮殿を定めるのが慣わしであった。

宮殿の庭に立ち、澄んだ空遠く、香具山を望んで女帝は歌を詠んだ。とはいえ、ここまで来るのに、決して平坦な道のりではなかった。血の濃さでは以前には問題にならなかった高市皇子のことが浮かび上がってきたからだ。太政大臣をつとめ、人望があつた高市皇子については、壬申の乱をともに戦い、勇猛で知的な高市皇子こそ、自他共に中皇命と許す女帝が譲位すべく、それにふさわしい人であった。それにもかかわらず、女帝には自分の血の意識とそれを越える女としての血脈の執念があつた。

この事態になって女帝は父天智天皇の盟友中臣鎌足の

子で律令に精通し、権謀術数に長けた不比等を権力構造の維持のために、自らの側傍に引き寄せた。このさなか、六九六年に、高市皇子が原因不明で急死すると、女帝の意を受けた不比等の策略により自分の血の正当性の維持にとって、もはや有害無益な存在に変質していた人麿は流罪となり、朝廷から遠ざけられることになった。不比等はその功から藤原の姓を持統女帝より賜った。ここに、遠く百済の血を引く藤原氏が名実ともに誕生した。この百済系の貴族が天皇家と姻戚関係を密にして後の世を支配することになった。日本における支配階級の常套手段である。この頃に、女帝は百済は扶餘の一系とみて、百済王子禅広の子孫に百済王の姓を賜った。女帝が自ら建設したこの藤原京で、翌年に孫の文武に念願であった譲位を果たし、自分の重い責務である百済の血を、そして扶餘の血、王家の血を護ったことを確信した。その持統上皇が五年後に《素服哀ヲ挙グルコトナク、文武官ノ政務常ノ如ク、哀葬ノ事務ハ儉約ニ従ハシム》との自らの詔書を遺して崩御した。

しかし、彼女のそんな願いと思いは、永くは続かなかった。それから五年後に、文武天皇が若くして崩御すると、今度も、血筋を護るために、持統の妹であり、文武の母である阿閉皇女が即位しなければならない事態になった。亡き上皇の思いを何としても実現しようとする女の凄まじい血の執念であった。皇后でもなかった阿閉皇女の即位は異例のことであった。

因みに正式に皇太子になり即位した女帝は歴史上、聖武天皇の次の孝謙(称徳)天皇のみである。

阿閉皇女が元明帝として即位してからまもなく、七〇八年に武蔵野国で銅が発見された。銅が献上されると、これを祝って元号を和銅に改元した。そして、和銅開珎が鑄造された。七一〇年になって、唐の長安にならって築城した平城京に遷都した。百済のかつての都の公州に風光の似た、美しい奈良(寧楽)の都は人々の憧れの都になった。奈良とは《ナラ》、国の意味である。古い国、宮廷のだれもが、美しい伝説のクナラ、百済(クダラ)を想った。そして七一五年になると元明の譲位を受けて、草壁皇子との間に生まれた娘の元正が即位した。何としても自分の血筋に皇位を繋ぎたかったのであろう。とにかく皇位の血を護るための政治闘争の連続であった。とはいえ、文化的には仏教美術が盛んになり、白鳳文化を経て華麗な天平文化の開花の時期を迎えた。そして、この期には、天武帝の念願でもあった『古事記』、『風土記』、『日本書紀』というような、歴史・地理に関する書が編纂され、日本が対外的にも国家を形成していく時期に入った。皇室が支配する限定した地域の意味の《大和》が真に日本を意味するようになったのはこのころである。やがて、文武の子の聖武天皇が即位して、やっと自分たちの百済の、そして扶餘の血を護ったとの思いを確かめることができたのであろう。ところで、大宝律令が文武天皇の時に制定され、大和は律令国家の

建設に着実な一步を踏み出していた。一方、この頃は韓半島の新羅は唐と結んで勢力を増長し、東アジア各国間の緊張が高まった時代でもあった。大和は、過去の経緯とは別に、唐と外交関係をもち、国の建設に積極的に活用した。新羅や高麗とはそれから長い間、正式な国交をもつことはなかったが、民間では貿易が盛んであった。これより少し前、大陸から半島にかけて唐に滅ぼされた高句麗の王族の後裔が立ち上がった。大祚栄が六九八年に渤海国を建設した。版図は韓半島北部から満州沿海州におよんだ。さらに豆満江から日本海に進出した彼等は、大和に交易を求めてきた。高句麗王朝の流れをくむ渤海国との関係には大和の宮廷は血の伝統を意識し、積極的に交流を進めた。

この時代にあつて、三女帝のうち、持統は国家そのものを意味する血統を自らの手で保持した。また元明は陰陽道に基づき、先行する天皇の血統と在位の紀元を明確にした。そして元正は皇統の血の元を正しく維持し、後世に伝え、この地を国家として創りあげた。そんな執念に思いを馳せるものである。

八

ここで、文化的にも政治的にも絶ちがたい密接な関係をもつ韓半島と日本列島についての歴史を改めて遡ってみたい。三世紀後半にあつて半島南東部の任那を本拠とする王族の一人が九州地方に入った。日本では十代目に数えている崇神天皇である。神の名が付き、後に皇室の祖として崇められた王は三人いるが、応神天皇と共に深い意味のある諡号である。伝説に依れば、彼の曾祖は満州にあった扶餘国の解夫婁であった。この王の意志と血筋は高句麗の朱蒙を経て、百済国の温祚王と、その兄の目支国の沸流王に別れて受け継がれたとのことである。そして時を経て後者の傍流が南下し、半島を東に廻って、さらにその一部は御目支(御真木)の地に定着したという。後に天皇と呼ばれた崇神は韓国側から見て優禰と呼ばれ、『古事記』では、所知初国^{ハツクニシラス}之御真木^{ミマキノ}天皇、『常陸風土記』では初国所知美麻貴^{ミマキノ}天皇で、どちらも《ハツクニシラス・ミマキノ・スメラミコト》と呼ばれている。その意味は任那城に住んでいたことを示す、後世の天皇の呼び名である。任那は君主を表す《ニム・ラ》も意味し、ここが屯倉(官家)で領地であった。少なくとも、比較的大きな部族長の合議制から成る貴族会議の筆頭たる者が王であった。

当時、王は世襲制であったが、この会議が王としての資質のみならず周囲の組織的な権力と権威に基づいて、その適格性を決めた。これにより、無用な同族間の争いを避けた。その会議のなかで和をもって王位を譲ったのが同じ王族の一人のこの優禰であった。ところが、来てみると心配をよそに、この地や定着したあたりは気候も

良く農業・漁業に適し、資源も比較的多く、暮らしに好都合であった。ほどなく、軍事的にも大きな力をもつようになった。

しかし、子の垂仁の後には内紛もあって、この間隙に乗じて、力の衰えたこの百済沸流系に替わって、同じ扶餘族の血を引く、遠縁にある新羅系の景行が王位を要求し、強引に王位を嗣いだ。それから時代が下って四世紀の中頃、この先発部隊に倣って、任那を本拠とした、より本流に近い王家一族が地理的条件のよい北九州に入ろうとした。任那を大和の本家とすれば、先に渡来し、この地から大和に入っていた分家の崇神王朝や新羅系統にある景行王朝より、この王族の扶餘の血は濃いはずである。ところで、沸流系の流れにある優台を父、召西奴を母とする百済の契王(本名が本牟太)は神の怒りに起因する凶年と厄病のため、和合制決議によりやむなく僅か二年で退位した。天の意に沿わぬ王であったからである。しかし、野心家であった彼は諦めずに、側近の王族の優福を伴って本邦九州北部に渡来した。これが後に応神天皇と呼ばれた大和大王である。彼の業績については、歴史と文化がこの個人に投影された姿として述べる必要がある。この大王がそのように百済の正当な出自であり、権力を掌握しても、後世には、史実に少々手を加えざるを得なかったようだ。おそらく万世一系の血統の連続性を強調するために、敢えて神功皇后と新羅系の仲哀天皇との間の子として、百済系の応神天皇を説話上で誕生させたのであろう。すなわち、これによって表面上は新羅系色を消し、百済沸流系の王家がずっと以前から継続していたように装う目的で、後世になって、そのような説話を創造したのであろう。それゆえ、三韓征伐の説話も大和の半島に対する優位性と血の正当性を誇示するために挿入した後世の架空の話であろう。しかし、正当な大和王家を嗣ぐ血筋として、ともかくも王家の血統を新羅系から百済王家のより濃い扶餘の血を引く沸流系に神が取り戻した。その意味で「神」の名がつく天皇としたのであろう。

このようにして、支配領域を拡大した河内の大王家が、先陣の王朝との激しい争いはあったものの、ついに大和に入ることができた。結果的には、血筋の本家に近い新参加者が、血の薄まった旧来者を征服・懐柔・吸収する形で大和王朝を建てることに成功したのであった。

大和に大王・大伴・物部の古墳が見られ、河内に大王・大伴・物部・中臣・平群・葛城・巨勢・和珥・春日の古墳が見られる。このことは、先住の崇神の名で代表される王家が一族とともに大和に入り、これを新羅系の王朝が受け継いだことを、さらに、任那の本家のより濃い扶餘の血筋を引く神王家が有力な家臣とともに河内に入ったことを示している。そして、この神王家が前王家に替わって、より強固な支配体制を確立した。この地における二群の古墳の分布からそう推測される。百済の嫡流の近肖古王が同族としての親愛を示す証として

三七二年に、大和王(倭王)になったこの王家の神に七枝刀(七支刀)を呈している。この刀は石上神宮に納められ現在国宝に指定されている。祝福と同時に、百済と大和の血の濃淡が両王家に示されたのであろう。

神の次に即位した仁徳の陵と伝えられる大山陵が現在の堺市に築かれた。この頃には、個々の大王の実在性や系図上の意図的な除外説はともかく、どうやら大王家の基盤が固まりつつあった。このころは、もちろん大王は王の尊称に類するものであって、地位を意味するものではなかったし、後者の意味では、ずっと後に使われたものである。この王家の血統がそのままずっと何代も続いた。しかし、子がなく王位継承が不可能になると、沸流系の神嫡流の手白髪皇女と百済温祚王系の男大迹がいわゆる婿入りの形で結びついた。母が越前三国の出身である彼は、大伴氏らの支援もあって、王位を窺っていた。しかし、王位継承を主張するものは他にもいた。大伴は大連の姓が示すように王族の一員であったろうが血は王位の範囲に入るものではなかった。実力があっても大伴は王位にはつげなかった。このことは王位継承にとって特筆すべき重要なことである。それから二十年の永き歳月を要して、やっと大和国内の強い反対勢力を抑えて、後に、拙著『王家の祠』の舞台となる樟葉で即位した。この男大迹が王位に象徴される国の体を継いだ、後の継体天皇であった。ところで、百済の王族の昆支(餘昆)とこの男大迹王は温祚系の・有王を祖父、蓋鹵王を父とする兄弟であった。したがって、昆支の子で斯麻(しま)と呼ばれた武寧王の叔父にあたるのが継体天皇である。欽明天皇はこの天皇と手白髪皇女の子であるから、百済の武寧王は従兄にあたる。

雄略紀四七九年四月条には、昆支の子の東城王が大和から百済に帰って即位し、東城王の後には、五〇一年に弟の武寧王(斯麻王)が即位したと記されている。五〇三年に武寧王が継体に隅田八幡鏡を贈って、彼の長寿を願ったのも、両者がこのような血縁関係にあったからである。五三一年、継体天皇の没後は彼の先妻の子である安閑・宣化が後を継ぎ、さらに欽明がその跡を継いだ。とすれば、当時の両国の付き合いが容易に理解できる。

ところで、この武寧王の残した血脈が実は皇統にとっては重要であり、この『王家の祠』の物語のなかで大きな意味をもたせた主題となるものでもある。その意味で、武寧王の存在の意味は極めて大きいものがある。実際に、公州で発見された武寧王陵の棺は直径百三十センチ、重さ三・六ト、樹齢三百年以上、堅くて湿気に強い高野槨からなる。これは最高級で、この木は雨水の豊富な高野山周辺の日本特産種でスギ科常緑樹である。百済と大和の交流の親密さゆえに大和からもたらされたものである。

こうした歴史的背景から、大和と百済の二国の間には、早くから親交があったし、いわば親戚同士の付き合いであった。それゆえ、すでに六世紀末には、互いに国としての協力関係にもあり、定期的に大和に送られた五経博士は

大和の文化の発展にとって極めて重要であった。それから後に、両国間には権益を巡って、何度か小さな争いがあった。しかし、長い間、概ね友好関係を保っていた。高句麗王家とも共通の祖をもつ、近い親類関係にあった大和王家と百済王家は、おそらくそんな付き合いであつたらう。ちょうど、ヨーロッパの王室の血縁関係と交流を連想させるものである。この観点は王族やその支配する国家の動きを推定する上で極めて重要である。

九

ところで、このような王家とは別に、五世紀頃まで、動乱による生活環境の変動の激しい韓半島を避け、有力な技術小集団が渡来してきた。誰もが、安住の地が欲しかったからである。力が衰え、治安が行き届かない百済から逃亡した者が多く、『日本書紀』にもその記述がなされている。他には、四百年間続いた楽浪郡の衰退と共に、外交事情に通じた漢人も渡来してきた。

この中で、王氏は名前から言って、半島を経由していたとしても、出自が元々は大陸の血であつたらうと推測される。このころの渡来人は土着の豪族に支配されることなく、自由な立場で自らの能力を背景にして、朝廷に直接仕えた知識人であり技術者であった。その主な氏族には、他に大和の漢氏、山背の秦氏、河内の文氏が挙げられる。秦氏は葛野川流域を開発して養蚕や農耕に従事した。神祇信仰と結びついて、賀茂神社の加茂(鴨)氏とともに在地勢力として発展した。京都の聖地といわれる下賀茂神社から京都御所さらに神泉苑の広大な水脈を護った一族の鴨脚家が今も続いている。文氏は文筆・学問を専門とする家柄であった。西文氏がここを起点に北陸の方まで広がり、地名を今に残している。漢氏は朝廷の文筆・財務・外交などに従事した。やがて手工業を主導し、兵器を備え相当な武力をもつ有力氏族となった。

時代が下って六世紀前半になると、韓半島は新羅の台頭によって百済・加羅との勢力地図が大きく塗りかえられようとしていた。百済の聖王(聖明王)は高句麗の侵略によって半島西の扶餘への遷都を余儀なくされた。国防の苦境に立たされていた百済と半島南部を領する加羅に大和の欽明天皇は軍勢を送り込んで支援していた。人口の多い大和のできる援助は、主として人の援助であった。この頃は史実からいっても、大和はすでに対外的に十分な影響力をもつに至っていた。この支援は百済の強い要請を受けての措置であつたという。外交上、《天皇》と云う尊称が使われるようになった。しかし、この頃は、いまだ政治的意味を表す後世の天皇ではなかったし、地位を意味するわけでもなかった。すなわち、大王の呼称と同様に最初は一種の称号であつた。

ここ半島東南部は良質の鉄の産地で、百済・加羅・新羅・大和の権益が複雑に絡んでいて、鉄の権益は政治

的にも軍事的にも極めて重要であつた。鉄の支配が血筋と並んで韓半島はもちろん大和の皇統維持に決定的な力であつたからである。したがって、このような利害には、どの国もとうてい関心なしではいらなかった。百済の聖王が五三八年に、阿知使主(阿直記)と王仁を使節として大和の欽明天皇のもとに先の理由で遣わした。その贈り物として金銅釈迦像と経典千字文が伝えられた。大王をはじめ陪席の大臣・大連などの顯官や群臣たちは、金色に輝く仏像の姿に接した。初めてみる神々しい大韓神に思わず嘆息を漏らしたことであろう。まばゆいばかりの光と優しさにみちた仏像であつたらう。残念ながら、その金銅釈迦像は現存しないが、金色に輝く百済伝来の仏像と同様のものと推測されるものが今日の韓国に現存している。その作風は後の飛鳥時代の造仏に影響を及ぼした。鞍作鳥の法隆寺釈迦三尊像はその代表例である。これが大和への最初の仏教伝来であり、まとまった文字の伝来であろうか。

ところで、新しい宗教観を受容する下地は、古来の神々を崇拝していたこの時代の人々の間にはまだできていなかった。本来、大陸から影響を受けて長い時間をかけて成立した、神鏡、神剣、玉類という宗教的依憑は、このころは既に民族固有のものとして、定着し、神道のおかげで神聖化されていた。

その中であつて、仏教に根ざす習慣が優勢になり、大和固有のしきたりに反することが目立つようになったことへの懸念はあつたものの、仏教伝来を契機に文字を学び、教典の意味を知り、やがて仏教が宮廷周辺の人々に徐々に浸透していった。比較的新しく渡来した百済王家に連なる蘇我氏は仏教を優遇した。蘇我稲目とそれに反対する古来の神道のみを敬う物部尾輿の政治的対立は深刻であつた。「この国には、美しい伝統があり、わざわざ得体の知れないものを……」というわけであつた。五七〇年の稲目没後に、尾輿の巻き返しに起こした仏教弾圧がそれを物語る。しかし結果的には、仏教擁護派が蘇我馬子の時代に物部守屋に勝利した。大韓神とよんだ仏教が政争の道具となった。この国の安寧を護り、百済の血をそして我が皇統も護るために、宗教上の争いを名目にしたというよりは、大王家を巻き込んだ新旧勢力の主導権争いであり、最終的に旧勢力が敗れ、滅亡し、やがて時代の中に埋没していった。

これとは別に、百済芸術は高句麗を源流とし、仏教と共に優雅で洗練された貴族的性格が強く、大和の人々の心を捉えた。日本には仏教芸術としての影響が大きく、百済伽藍という建築様式が飛鳥時代に各所に見られる。代表的なものが四天王寺である。伽藍の配置は中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ典型的な百済時代の様式である。聖明王の父が武寧王である。公州に有名な武寧王の墳墓がある。聖明王自身のもので伝えられるすでに破壊された墳墓が近くにある。前者は一九七一年の水系遮断工事の時に、偶然発見されたという。王妃との合葬墓で

ソンスルリ
宋山里古墳群の一隅にある。盗掘を免れた完璧な史跡である。後者は一九三三年に日本軍が破壊した。そのとき立ち会ったのが、日本の高校の歴史教諭であったという。したがって、今ではその古墳が誰のものであったか、それを確実に知るすべはない。極めて残念な歴史の歪曲に繋がる文化財破壊の暴挙であった。

十

このように、古代にあっては日韓両国というよりは、一体化したこの地域での様々な相互のやり取りこそが歴史そのものであり、ヨーロッパの歴史を扱うとき現在の国境をもってではなく、一体化した国際関係いや国内状況を述べることに全く同様である。もし、日本と韓国が陸続きであったなら、かなり心理的に楽に両国の歴史が両国民や周辺の人々に共通のものとして受け入れられたと思うのだが、如何がなものであろうか。

我が国では社会の大きな変革は必ずといって良いほど外圧が働いたことによるという。とくに国の存亡の危機感や何らかの敗北感が国内に広まり、苦境に陥ると指導者の資質が高まり、周囲も一致してその不足を補う努力をすることが歴史の中の随所に見られる。韓半島と本邦で、部族国家が成長し充実するとともに、国家間の紛争が次第に複雑化し、次第に大規模な紛争に変貌してきたのが七世紀前半である。その時代にあって、これまでの小規模な国際交流や戦争の仕方を旧態依然として踏襲したままで、国際紛争で最終的に強国の前に決定的な敗北を喫した大和は、天智天皇の治世のもとで、大きな変革に取り組んだ。この期には百済からの亡命者を多く受け容れて、多方面で活用するだけでなく、一転して、本邦からも人材を海外に送り制度や法律など多くの事柄を学ばせた。そして、さらに学問の基礎の修得のために必要な人材を積極的に戦勝国からも招請した。その結果、新来の人々と旧来の人々が互いに協調する体制が整い、やがて社会のなかで融合同化していった。具体的には行政、立法、司法などの制度的整備だけでなく、教育文化の積極的向上にかなりの重点を置いたことが、後の日本独自の文化形成の遠因としての決定的な役割を演じたようだ。つまり、天智天皇の国家建設着手の時代から天武・持統両天皇の時代を経て、次々と行われた諸々の施策が国造りの礎となった。そして、それらを原形とした国家の確実な発展過程を歩みながら、桓武、嵯峨に到る頃になって、ほぼ日本の姿の基礎が形成されて、それが以後の独自の文化や社会発展の推進力になった。

今後は、そのなかにおいて支配者階級の密な関与が天皇の権力と権威をいかにして形成していったかを考えてみたい。そのためにも、皇室周辺に存在した支配者階級の間に掟として存在していた、王家の見えない

心理的拘束力の関与が、日本独自の文化と社会の発展に影響を与えていったことを、同様に「天孫と血の思想」の視点から眺めてみたいと思っている。

繰り返しになるが、日本が古代の部族国家に別れを告げ、統一国家になるきっかけは、何と言っても唐と新羅の連合軍に敗れたことであろう。王家の血筋と経済的権益を護るために連合し、利害を争ったそれまでの国際的関係のかつての形式が変化し、このとき真に誰を盟主として国家建設を行うべきかが認識され始めたからである。ところで、唐王朝が前面に押し出した国家観であって、支配者である王としての資格と資質を実質的な力に求めるという理念の萌芽は、それ以前にも蘇我氏の間に見られた。天智にもそうした考えが受け継がれたが、同時に血を基本とする自らの周辺と過去の権益と伝統を守ろうとしたが故に、ほとんど改革には実効が見られなかったようである。そして現実には、大和の王族への柵に囚われない海外の状況を良く知る天武が、自らの立場を強調し、権力の基礎を固め、後世にその発展を託した結果、女帝三代を經過して支配領域にしても、国名にしても、国家としての統治原則と統治機構の体裁を整えることができた。しかし、これらを裏づける国家的実力は、当時の困難な国際関係のなかでの数知れぬ努力と皮肉にも壮絶な権力抗争の中から生まれたようである。

そして、それが引き継がれ、紆余曲折の末に約百年後の桓武天皇や嵯峨天皇の時代になって、概ね完成し、それを基にやがて大陸や半島とは異なる政治機構をもつ国としての成長過程と独自の文化の発展過程をもつに到ったのであろう。しかし、天孫という特別な意味を血筋の内のみ求めた強固な伝統は衰えることなく、以後も連綿として受け継がれていった。その辺りは、拙著『王家の祠』の終盤で扶餘の血を受ける百済王明信が暗示的に語った通りである。そして、その特別の意味の中に諸々の社会的要素をかかえ込み、巧みな融合の過程を経て、さらに化学変化を起こし、基本的な核となって日本社会全体の枠組みの変化を伴って発展してきた。こうしてそれが日本人の行動原理として永く受け継がれ、同時に制約ともなりながら、歴史のなかで時代とともに少しずつ変容して、今日の我々の眼に映るものになったのであろう。

拙著では、また大和で渡来人達の後世への影響について描写した。百済の文化の流れが現在の大阪府の交野^{かたの}の地に定着し、この地で古来の文化を核にして融合・開花・発展したことは、日本のその後と今日に至る文化に与えた影響の大きさを物語る。そのなかで重要なことは、原日本人ともいべき古来の日本人の自然観と宗教観が渡来文化との融合によって、大陸や韓半島からもたらされた価値観の前向きの変化と発展・高揚を促したことである。その典型的なものが花鳥であり風月であり宗教であろう。自然に対する認識で、とくに目立った変化は

桜が代表される花であった。我が国では古来、中国・半島の影響により、蓮の花とともに梅の花が最も重視され、梅がいわば国の花であった。言葉は適当ではないが、松竹梅の《軽重》のイメージは日本の地で変化した。平安時代には桜が国の花になったし、菊が重んじられるようになった。どちらも、日本の風土にあった花であり、貴族が親しみ、文化的にその美を高めるようになったからである。次に宗教についてであるが、万物に生命を感じ自然に生きる。その基礎に立つ神道の精神と仏教が融合した日本独自の神仏宗教が、やがて、自然と心が融合した美しい宗教として高邁な精神性を生み、生活を通して四季の花鳥風月を核とする日本の芸術を生んだ。そうした風土の中で生きた遠い祖先の豊かな心をずっと崇拜し続けた、伝統をもつのが今に至る日本人であろう。日本では特定の教義や主張に囚われず自然を媒介とし、無心で道を求める心の宗教が終始変わらず大切であった。これは、遠く先史時代から脈打つ、自然の中で生きる伝統が人々の心の中で芸術と融合した結果であり、美しさを求めるいわば芸術的宗教の心が生活の基本としてずっと受け継がれてきたからである。

ここで、「菊」についても語ろう。菊は中国原産で、万葉の時代までは、日本ではほとんど見られなかったようだ。中国の故事に詳しい桓武天皇が菊を取り上げたことは意義深い。八〇七年の重陽節句には平城天皇が菊花宴を開催した。以後これが恒例になり、大和の宮廷に菊が根を下ろすようになった。次の嵯峨天皇は唐風の学問や芸術などに造詣が深く、その影響もあって、菊は桜と共に宮廷文化の花となった。勅撰漢詩集の『ハクシウ凌雲集』と『キョクク経国集』には、嵯峨天皇の手になる《菊》を詠んだ多くの漢詩が見られる。とにかく宮廷で、重陽節句と菊の花との強固な結びつきが定着した。菊水による長命の中国故事から、菊花の雫の心身に生気を与える効能やこの節句の不老長寿の物語は、平安王朝の知識人にとって、和歌や絵画の主題にもなっていた。この時代には、《菊》が文雅宴会に欠かせない題材としてとりあげられ、宮廷でこのような曲水の宴も開かれるようになったという。宮廷貴族の愛好や絶えざる日本人の手になる改良により世界的に認められる芸術の域に達した菊花は、明治維新の太政官布告により最高権威の象徴として皇室の専用の紋章になった。戦後は諸処で菊花の図案が使われるようになったが、それらは高貴な品格の象徴とみなされ、《桜》とはその扱いが異なることが少なくない。

以上をまとめてみれば、三世紀前後からの組織的な渡来人の後ろ盾があって、その後には渡来した大王家と周辺の支配階級が多方面にわたって大きな力を備え、古墳時代から列島を支配したことが大和王権の起源であった。そして、その発展のために支配階級が求めた、

王家の血統の重視とその維持や軍事・統治の重要性は十分に強調されるべきであるが、これとは別に、血の濃度に応じて、宗教的責務と天文学を基礎とする農業や生活全般、それに伝統文化維持という責務の重圧を自ら王家と支配階級に負わせていたことを見逃してはならないであろう。そして、これが結果的にも国民からも敬われる今日の皇統を形成してきたのであろう。言い換えれば、これらの内的要素と東アジア地域の環境が絡み合いながら永きにわたって、いわば広範な皇室の「権威」と相互作用してきたのが、皇統存続の最大の理由であろう。このことは、皇統に最も色濃く入った百濟王の血統が遠くは扶餘に遡る天孫の系であるとの思想の重要性のもとに、政治的問題から離れた諸問題については、先述の内的要因として処理されることが多く、権力とは別の権威の次元で動いてきたことが少なくないことを意味している。それゆえ、古代の両国の力関係が過去にどのようなであったかを詮索するよりも、底辺での一致・不一致を明確にして、日本を創った人々と半島の人々の間にあった密接不可分の人的交流とそれに伴う対立の存在を率直に認めることと、地域文化圏の境界の固定化とともに、両国の今日の姿への変化を、事実の積み重ねとして理解し、納得することが重要である。そして、そこから生じる真の産物が、意識的に選択され、相互に忌憚なく主張すべき根拠として両国民によって明確にされれば、これが相互の信頼の土台となり、今後の真の両国関係の揺るがぬ基礎となると信じている。そのためには、真実を明らかにできる最大の宝庫である皇室の歴史的遺産や古墳が両国民に公開され、この地域の歴史に関する共通の認識を両国民がもつことが肝要である。

筆者個人としては、やや独断になるが、永きにわたる世界でも類を見ない皇統を現在に続く制度を含めて、さほど強い意識を集中することなく、周辺の地域とともに、これまでに準じて、緩やかに永く支えていけるという認識をもっている。その理由は、それらがこれまで無数の血と無数の智恵、そして無数の社会単位やその文化が長い時間の中で混在しながらも見事に融和して、一つの価値観だけに囚われない大きな包容力そのものに変貌しながら、現実には我々の眼に優しく触れているからである。

それゆえ、古代から現在に到る連綿として続いた諸々の価値を包容可能な存在として、その伝統を実際に確実に守り、そこから新しい価値をも優しく育み、それを継続的にこれまで発展させてきた大きな担い手として、永きにわたる歴史と両国の血縁を今に伝えるこの家系に改めて敬意をいただきながら、筆を置くものである。
2003年12月